

特別版 『セイム月報』 No. 10 (915)/2020 pp. 112-129 (関口時正 訳)

それは、流行などに囚われることのなかった、真に一流の人物だった。

その業績は、ヨーロッパ文明の基本的な枠組みが生きながらえるかぎり、生きながらえるだろう。

ひとことで言えば、彼は——ポーランドのアリストテレスだった。

コペルニクスと並んで、ポーランドが生んだ最大の思想家だと言う者もいる。

イエジー・ペジャノフスキ Jerzy Perzanowski (哲学者、倫理学者)

ロマン・インガルデン ——不屈の哲学者——

1970年6月のポーランド南部は好天だったにちがいない。ヤギェロン大学を退官したロマン・インガルデン教授は山歩きに出かけた。そして美しい山々の眺めを楽しんだにちがいがなかったが、それが自分の見る最後の山になるとは、思っていなかっただろう。山行の翌日、彼は脳溢血にみまわれ、二度と回復することはなかった。1970年6月14日、インガルデンは他界した。

「自身と自身の存在を信頼する」

インガルデンは最後の最後まで活動的だったと、ともに仕事をしていた人々は語った。哲学に対する彼の取り組み方は深く、創造的で、真摯で、揺るぎのないものだったと、彼らは強調した。その言葉は、名士の死後にありがちな儀礼的、社交的な弔辞ではなく、哲学の発展に異論の余地ない貢献をなしたとげた人間の天才を物語る偽りない証言だった。

これよりはるか以前にそのことに気づいた、司祭にして教授のユゼフ・マリア・ボヘンスキ (Józef Maria Bocheński) は、インガルデンについてこう語っていた——「私が深く尊敬する、ひとりのポーランド人現象学者がいます。インガルデンです。古今を通じておよそポーランドが生んだ最大の思想家であり、20世紀ヨーロッパの最大の思想家のひとりだというのが私の管見です」。

チェコのすぐれた哲学者でフッサールの門人、「憲章77」の発起人として共産主義政権に弾圧されたヤン・パトチカもまた、同じような意見を述べていた——「広範な関心、徹底した分析、鋭く独創的な着眼によって、インガルデンはもっとも傑出した現象学者だったし、ポーランドのみならずスラヴの思想家として

も第一人者だった」。

現象学を代表する主要な学者のひとりとされるロマン・インガルデン。その著作は哲学の古典と同列に並べられ、『世界の存在をめぐる論争』は、アリストテレスの『形而上学』と比較された。そしてたとえば講義中に「アリストテレスはそう言ったが、私は同意しない」と言ってなおかつその言葉に信頼が置けた唯一のポーランド人哲学者だと言われた。また、フッサールの観念的で超越的な現象学とちがって、より客観的で現実的な、第二の現象学の創始者としてインガルデンをとらえる試みも時としてあった。彼の考える哲学は、無前提の、独立した研究分野だった。哲学においては、言葉のもっとも広い意味における経験の中において説明可能な基礎をもたないいかなる公理も受け入れることはできないと、彼は強調した。

ルヴフ、ゲッティンゲン、フライブルク……

ロマン・ヴィルト・インガルデンは、1893 年 2 月 5 日、〔ポーランド南部の古都〕クラクフ市に生まれた。1909 年当時につけていた日記の中で、少年ロマンは、自分と自分の家族をこう描いている——「僕の父ロマンは、お役所の階級の中でも高い地位にいる。ガリツィア水道建設局長、宮廷顧問官、etc., etc. 僕の母、ラドヴァンスキ家出身のヴィトスワヴァは、昔のポーランド共和国、クラクフ共和国の元老院議員たちの子孫で、とても優しくて勤勉、心配性でこわがり、そんな母の唯一のフェレル（ガリツィア弁で言う「欠点」）はおしゃべりだということ。（……）僕については、さらにつけ加えれば、色々とすぐれた才能はありながら、生来意地悪な、無作法者に近い性格というのが母の意見。一方「ベルフェル」〔教師を馬鹿にして言う語。「先公」〕たちに言わせれば、ある種の芸術的創造性にめぐまれた、感情的、爆発的、情熱的な性格の持ち主。自分がどんな人間なのか、自分にはわからない」。

日記の先の方を読むと、スポーツについて書いてある——「僕のスポーツはサッカー（ゴールキーパー）、競走、スケート、橇。スポーツクラブ《ボゴン》会員として陸上競技をしている」。また文学に関してはシエンキエーヴィチ（Sienkiewicz）、レイモント（Reymont）、ヴィスピャンスキ（Wypiański）を読み、自分でも何篇か詩を書いたとも記している。インガルデンはその後も文学的関心を失うことがなく、その関心はやがて、文学作品の深い美学的分析と哲学的理論となって実をむすんだ。

そうした情熱は、彼がゲッティンゲンで知り合ったエディット・シュタインにも伝染することになる。後に聖人となるシュタインは、インガルデンに宛てた手紙の中で、レイモントの小説『約束の土地』と『農民』に感銘を受けたと記し、ヴィスピャンスキの『婚礼』を送ってほしいと頼んでいる。ポーランドの愛国者たちについて賛嘆の思いをつづった彼女は、1918 年 10 月 6 日付フライブルク発の手紙でこう書いている——「時々、未来についてのある種の見通しが、もはや心底堪えがたいと思える時、私は、過去 150 年間のポーランド人愛国者たちの人生を顧みるのです」。

1911年の秋、インガルデンはルヴフ大学で哲学の勉強を始めた。「それは偶然ではなかった」——と彼は日記に書いている。中等教育修了試験を受ける段階で、彼は、すべてのすぐれたポーランド人作家の作品とそれらの作品に関する論文を少なからずすでに読み終えていたが、そうした論文は彼に樂觀を許さなかった。「その90%が、文学以外のことにかかずらい、作家の私生活についてのゴシップに足を取られるか、似非哲学的な脱線をして本筋を見失っていた」——と若きインガルデンは評価した。彼にとっては、まさに哲学こそが文学作品の研究を可能にするはずだった。

だがルヴフ大学での勉強は未来の現象学者を失望させた。父は息子の国外留学に同意した。若きインガルデンが選んだのは、ドイツの下ザクセン地方にある大学都市、ゲッティンゲンである。留学先の選択にまちがいなかったことは、彼の日記を見てもわかる——「ゲッティンゲンは、何よりも、驚くほど多様な学問的刺激を与えてくれた。それは講義だけにとどまることではなかった。カフェは、大学の若者たちが——特に冬の間——集まる場所だった。その中にはすでに博士号を持っている者も多かった。そうした場では、自分や教授たちの新しい研究成果を互いに伝えあい、議論すべき問題は議論した。刻々と立ち上がりつつある新しい学問に、自分も参加しているのだと感じられる雰囲気がある。そこにはあった。（……）ひとつの分野やひとつのスクールに閉じこもるということもなかった（……）」。



バート・ナウハイムにて（ドイツ 1911 年）

写真提供：クシシュトフ・インガルデン

インガルデンは、哲学のほかに数学と心理学も学んだ。エトムント・フッサールのゼミで、彼はずぬけた学生になっていた。1916年、彼は指導教授のあとを追ってフライブルク・イム・ブライスガウに移り、2年後、フッサールのもとで書いた論文『H・ベルクソンにおける直観と知性』により、博士号を取得する。

フッサールとその周辺に集まっていた学者たちとの交流は、インガルデン哲学の発達に影響を及ぼしたこと

は疑いない。この時期に知り合った、未来の聖人エディット・シュタインとの親交もまた、彼の世界観、人生観の形成に大きな意味をもった。しかしすでに学生時代から、ロマン・インガルデンの個性は際立っていた。現象学に魅了はされたものの、決して無批判ではなかった。その姿勢はやがてフッサール式の現象学を排して、自らの現象学を確立することにつながっていった。

インガルデンの息子が回想するところによれば、クラクフでもルヴフでも、父親の住居では、一番大切にされている書物の並ぶ書棚と書き物机のわきに、つねに4人の肖像画が掛かっていたという。エトムント・フッサール、マックス・シェラー、エディット・シュタイン、そして妻の肖像である。「母以外は、哲学分野においてもっとも大きなインパクトを父に与えた知性を代表する3人だった。父はこの3人ともっとも激しく、積極的に議論したが、その誰にも完全に同意することはなかった」——と息子はふりかえっている。そもそもフッサールの学派も歳月とともにゆっくりと散り散りになっていった。「完全に彼の言うとおりに仕事をしようという弟子はひとりもいません」——と、1926年10月9日付の手紙で、E・シュタインは嘆いている。そして、弟子たちは——その中にはハイデガーの名も挙がっていた——重要な問題では、恩師から離れていっている、とつけ足している。

「存在の真実をめぐる」エディット・シュタインとの論争

ロマン・インガルデンの学問的な経歴の中で、エディット・シュタインが占める場所は特別なものである。学生時代に知り合い、親しくなった二人は、ほぼ第二次世界大戦直前まで文通をつづけたが、残されたのはE・シュタインの手紙だけである。『存在の真実をめぐる論争』と題された本に収められたそれらの手紙は、傑出した二つの個性のあいだで交わされた、困難な対話と理解と協力を物語る、興味深い証言となっている。初期のE・シュタインの書簡の多くは、博士論文のこと、フッサールのもとでの仕事の特殊性や研究活動や教育活動についての話題で占められている。しかしやがて、彼女はより頻繁に、自らの宗教的関心に触れるようになる。彼女の《神》の探求は最終的に1922年の受洗、そして1933年の女子カルメル会修道院（ケルン市）入会へとゆきつく。

インガルデンはE・シュタインの深まりゆく宗教的関心が理解できず、同調もしなかった。手紙の中では彼女を傷つけかねない論法さえ使った。1924年6月19日付の手紙で、シュタインはインガルデンにこう反駁している——「学問的教育を受けた人間が、それも厳密な客観性に対する請求権を申し立て、どんなにささいな哲学的問題においても、徹底した研究なしには判断を下そうとしない人間が、あらゆる問題の中でもっとも重要な問題を、まるで田舎の三流新聞の文体を思わせるセンテンス一つで片付けようとするなどというのが、いったいどうして可能なのでしょう。〔あなたが書いた〕《大衆を支配するために考え出されたドグマチックな手法》という表現が、それです。どうかこれを個人的な非難とは受け取らないでください。と言うのも、あなたの取った態度は、《教会》の空気の中で育たなかった知識人の誰にも見られる、典型的なものだからであり、かく言う私自身も、ほんの数年前までであれば、まったく同様の態度を取ったに違いないのですから」。

それほどまでに世界観が違うシュタインとインガルデンだったが、二人は袂を分かたず、文通をつづけた。

「現在私が生きている世界、心の底から私が愛着をいだいている世界は、あなたにとってはまったくの別世界」——1925 年 11 月 29 日、シュタインはシュパイアーの町からそう書き送った。しかしただに次の行で、しかいそんなことは絶縁する理由にならないと断っている。そもそも宗教に対するインガルデン自身の姿勢が変わっていったらしいことは、3 年後のシュタインの手紙からもわかる——「もしもあなたが、宗教的経験の既判力の証拠ではなく、宗教的真理の探求という問題に、言い換えれば《神》の探求という問題に、本当に本気で取り組むのであれば、必ずやあなたは道を見つけることでしょう。《教会》の神秘家たちや偉大な聖人たちの著作に拠ることをおすすめします」（1928 年 1 月 1 日、ベルクツァパン）。

それから数十年がたち、1968 年の 4 月 6 日、当時クラクフ首都大司教だったカロル・ヴォイティワの招きで、インガルデンは「エディット・シュタインが研究していた哲学について」と題する講演をクラクフで行った。「私は、エディット・シュタインを個人的に直接知っていた、ポーランドでただひとりの人間です」——という言葉で始めた講演で彼は、彼女の学術的活動、カトリックへの入信、女子カルメル会修道院への入会、アウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所での殉教死について語った。その中でインガルデンは、エディット・シュタインが自分のユダヤ人としての出自を否定したことは一度もなかったと強調した。（彼女のユダヤ人としての出自については、ヨハネ・パウロ二世も《十字架のテレサ・ベネディクタ》の列福式、列聖式で触れている。十字架のテレサ・ベネディクタはシュタインの修道名）。「彼女の証しによって、ユダヤ教徒とキリスト教徒の相互理解の橋がますます強固なものにならんことを」——教皇はそう呼びかけた。

帰国——戦争と占領

1918 年、ポーランドに帰国したインガルデンは、ルブリン、ワルシャワ、トルン、ルヴフといった町のギムナジウムで数学、哲学入門、認識論の教師として働いた。この時期の E・シュタインの手紙は、そうした教育活動によって彼の学問的活動が麻痺させられるのではないかという心配にあふれている。インガルデンは、学校での職務と研究とを何とか両立させながら、教授資格論文『本質的問い』（ドイツ語）を書き上げた。

ロマン・インガルデンの家庭状況もまた変化した。1919 年の 7 月、彼はキエフ医科大学の眼科を卒業したマリア・ポル（Maria Pol）と結婚した。その結婚は永続きただけでなく、とても幸せなものだったと、インガルデンの息子は回想している。夫妻には 3 人の子供がいた。1969 年、ロマンの死に先立つこと一年にも満たない日、彼らは金婚式を祝っていた。

1927～1928 年、インガルデンは国の宗教社会啓蒙省の奨学金を得てドイツとフランスを訪れ、フッサール、ハイデガー、エディット・シュタインらと会っている。この時期に出版され、世界的名声をかちえた書『文文学的芸術作品』（ドイツ語）でインガルデンは、伝記中心主義や心理主義を排して作品自体に肉薄すべきだとする当時の潮流とも合致した、自らの文学理論を公にした。インガルデンは志向的対象としての文学作品を調べる。作品存在の源泉は作者の意識行為のうちにあるが、作品はそれらの行為に対して自律性を有する。したがって作品は作者と切り離して調べられねばならない。作品を認識することについての考察を作品の構造と結びつけることによって、同一作品に多様な解釈が生まれる理由を説明することが可能になり、ひいては——研究者たちが強調するように——判断の相対主義から文学研究を解放した。

1933 年、インガルデンは大学の教授に任命され、学校教師としてのさまざまな職務から身をひき、大学

の学術活動に専念することとなった。4年後、彼は次の著作『文学作品の認識について』（ポーランド語）を書き上げる。



ヴィトカツィからの直筆の手紙（S.I. ヴィトケーヴィチ 1935 年）

写真提供：クシシュトフ・インガルデン

第二次世界大戦の時期をインガルデンはおもにルヴフで過ごした。1940年1月から1941年6月までは、イヴァン・フランコ記念大学（ヤン・カジミエシュ大学はこう改称されていた）のゲルマン語ゲルマン文学科教授だった。1942年1月から1944年6月までは国立技術専門職業学校で数学を教えたが、同時に、「地下で」非合法に活動をつづけていたルヴフ大学人文学部の教育にも積極的に参加した。

占領中——専門的な文献に接することが禁じられながら——彼はその最大の哲学的著作『世界の存在をめぐる論争』（ポーランド語）を書き始めた。それを書くという仕事があったおかげで——インガルデン自身がそう告白している——彼は、もっとも過酷な時代を生きのびることができた。「あのような環境でもこれを書けたということは、ポーランドのレジスタンス精神が学術研究の領域でも生きていたという証拠のひとつにはなるかもしれない」。インガルデンはこの著作に最終的に完結した形を与えることをせず、事実上、死ぬまで書きつづけたと言える。哲学の主要な問題をあつかう『世界の存在をめぐる論争』は、ポーランドのみならず、世界の哲学者たちにとって、インスピレーションの源泉となり、ひとつのメルクマールとなった。

創造的な「人生の秋」

戦後、インガルデンはクラクフ市にあるヤギェロン大学に勤めた。正教授に任命されると同時にこの大学の哲学科の運営をゆだねられ、1950年まで学科長を務めた。ローマ、パリ、ブリュッセル、アムステルダムでの国際会議に出席し、この期間、彼の学術活動は大学においてだけではなく、国際的な場でも際立った。1949年にはポーランド学術アカデミー〔PAU〕の正会員となった（それまでは1945年以来、連絡会員だった）。

しかし1950年、当時の共産党政権はインガルデンを教壇から追放する。大学での公務停止は1956

年までつづく。この強制的休暇を利用して、彼は I・カントの『純粋理性批判』の新訳を仕上げたりした。1957 年、職務に復帰してふたたび哲学科長となると、彼のもっともめざましい学術・教育活動の時代が始まる。国内にとどまらず、合衆国でも講義をし、ヴェネツィア、クレーフェルト〔ドイツ〕、パリ、アテネ、モンペリエ〔フランス〕、オクスフォード、フライブルクの国際会議に出席し、国内外の学会で発表をした。1958 年、インガルデンはポーランド科学アカデミー〔PAN〕会員となった。



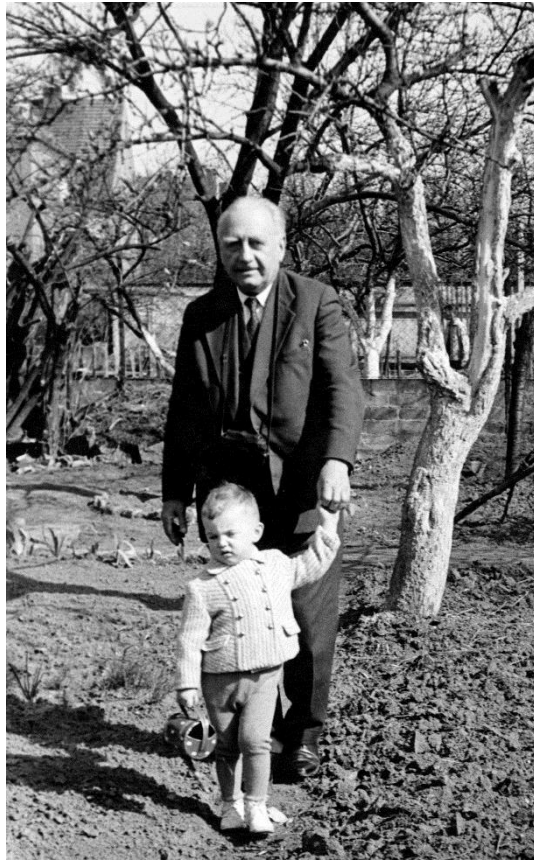
ロマン・インガルデンの書斎（1960 年ごろ）

写真提供：クシシュトフ・インガルデン

1963 年、インガルデンは退職を決める。それを機に、研究者仲間たちが寄稿し、彼に捧げた記念論集『哲学文集』が編まれ、出版された。退官を祝福する人々の中には枢機卿カロル・ヴォイティワもいた。インガルデンに寄せたその書簡の中で、クラクフ首都大司教は「先生のお人柄と姿勢、そしてその哲学的著作を」非常に高く評価すると強調した。また自身が若い研究者としてインガルデンに接したことをふりかえるとともに、「近年ではとりわけ司祭ユゼフ・ティシュネル博士など、聖職者であると同時に研究者である者たちを指導してくださり、感謝しています」と記している。

この手紙に対する返礼の中で R・インガルデンは、クラクフ首都大司教の言葉が「私の努力、私の研究がなにがしかポーランドの役に立ち、認められ、どうやらその果実もまったくなかったわけではないということの貴重な証しだ」と述べ、謙遜しながら、その評価は自分の仕事が「実際にはたした役割をはるかに超えた過大なものだ」とも記し、カロル・ヴォイティワに対して、大司教区の管理運営が順調に進むよう、幸運を祈っている。そして、哲学の分野においては喜んで協力したいと申し出ている——「もしも猥下が、何らかの学問的（哲学的）な問題を私と議論したいというようなことがあれば、私は喜んで猥下のもとに参上し、猥下が関心を寄せられるテーマについて討論いたしましょう」。

しかし退職がそのまま学術・教育活動の終わりを意味したわけではなかった。1967 年、インガルデンはオスロの大学でフッサールの現象学について一連の講義を行った。ポーランド哲学学会の美学分科会の会合に参加し、審美的体験の概念について考察した。人間学の諸問題についても関心を払った。



孫のクシユトフと（1961 年）

写真提供：クシユトフ・インガルデン

価値を実現する人間……

「人間は、価値を認識し、所有する必要を、さらに言えばどうしてもそうせねばならないとを感じるものである」——単行本『人間についての本』（邦題『人間論 時間・責任・価値』）所収の論文「人間の本性について」の一文である。人間は、道徳的価値、審美的価値なしでは、不幸だと感じる、とインガルデンは説く。「自分の中に根を張る動物性の限界を超えようとする不断の努力、価値の創造者としての人間の役割と人間性によって、動物性を克服しようとする不断の努力——人間の本性はその努力に根拠を持つ。その使命なしでは、自らを克服しようとするその努力なしでは、人間はふたたび、そして救いようもなく、自らの純粋な動物性に陥る。そしてそれは彼の死を意味する」。したがって、創るという仕事の務めを果たすことこそ、もっとも十全に人間の本質を表す、と彼は言う。

この姿勢を、ユゼフ・ティシュネル教授神父は英雄的だと呼び、こう付言する——「先生を知っている者なら誰でも、そこには単なる理論以上のものがあったということを知っている」。人間についての問いは、インガルデンにとって本質的な意味を持った。そして——ティシュネル神父が言うように——自分の考えに最終

的な表現を与えることには間に合わなかったものの、この問題の重要性と、この領域の研究の緊要性を力説した。「個人的な思想信条の自由を人間の基本的な価値であると考えられなかった時代が過去に何度かあったとしても、自由が大いなる価値であることが否定される時代がまたしても到来するかもしれないとしても、自由が単なる虚構、もしくは幻想であるという証拠には決してなり得ない」

自らの存在に対する忠誠は、人間にとってもっとも本質的なことがらのひとつであるとインガルデンは考えた。「私は、自由であろうとするひとつの力である。力が存続し、自由であり得るのは、真・善・美を創出するために力が自らを差し出す時だけである。そうしてはじめて力は存在する」——インガルデンによれば、それこそが人間性の本質なのである。「恐怖することなく、時間の中に自らを喪失することなく、世界に物としてある見せかけに服従することなく、自身のもとにとどまるすべを知らねばならない」——と彼は説いた。

ポーランド共和国下院が2020年を《ロマン・インガルデンの年》と定めたこの機会に、彼の「実りある議論について二言三言」という、いま読むのにまことにふさわしいテキストを思い出すのもいい。そこで筆者が力説するのは、自由で実効性のある議論が成立するには、第一に「他者の考えを否定したり、認めたりする以前に、他者のその考えの的確で忠実な理解」が必要である。第二の条件は、自らの先入観や知的な習癖を捨て、「自らの言語や自らの概念装置のオートマティズムから解放される」ことだという。われわれが自分の論理や価値体系だけに際限なく固執する危険について、インガルデンは警告する。そうした固執によって、議論は実体を失い、架空のものに堕してしまうからである。「互いに助け合い、協力し合うための機能として、議論はくだんの自由を獲得していなければならないし、また獲得し得るものなのだ。それはわれわれ誰もが人間の権利として要求すべき自由であると同時に、その自由こそが議論を公正なものとしてすることができるのだ」。《インガルデンの年》に行われるであろう、彼の業績に関する討議に対してのみならず、わが国の公益に関するあらゆる種類の討議に対しても、インガルデンは——もし生きていれば——そうした公正な議論を求めたにちがいない。ここに引いた言葉は、インガルデンの遺言とも、子孫に対する負託とも考えられよう。

対話に向かって

インガルデンの著作には、イデオロギー的頑迷さや独断的前提、自分だけが正しいとする思いこみといったものが見あたらぬ。そこにあるのは人間に対する思いやりである。

インガルデンの哲学は体系的だったが、彼はシステムの構築をめざしはしなかった。彼の哲学は開かれた性質のものだった。それを修正することは単に可能であるだけでなく、むしろ『世界の存在をめぐる論争』の著者本人が提案していたことだった。この書の序文でインガルデンは書いている——「したがって私とて妄想を抱いてはいない——論争というこのテーマについての私の議論の展開も、将来的には訂正し、変更し、深める必要が少なからず出てくるはずである。だが私が考察の中で提案した方向性の中にも、的確だということがわかり、問題全体の探求をさらに前進させる上で役に立つものが出てくるかもしれない」。古代では、アリストテレスが同様に教えを垂れた。「したがって私たちは、私たちと同じ見解を表明した人々に対してだけでなく、皮相な意見を述べた人々にも、感謝しなければならない。彼らもまた、真理の探究に何らか

の貢献をしたのである——彼らは、私たちの考えに道を拓いたのである」——『形而上学』にはそう説かれている。

インガルデンの本、彼の講義、セミナーは、いわば対話を継続せよという呼びかけなのである。彼とともに仕事してきた者たちは、対話の継続を実践した。たとえばユゼフ・ティシュネル神父がそうである。しかし彼らは——当然のことだろう——やがて自分の道を進んだ。なぜならば、ロマン・インガルデンのような偉大な思想家に捧げ得る最高の敬意は、自ら力で考え始めることにほかならないからである。哲学することとは——『世界の存在をめぐる論争』の著者が言うとおり——自己の責任において思考しようと試みることなのだから。

マレク・クルチク

ポーランド哲学のアリストテレス

三国分割、二度の世界大戦、そして長い共産主義時代といった不利な状況にもかかわらず、世界的な学者を多く輩出した、ポーランドでは比較的に数少ない学問分野のなかに、哲学が含まれる。ロマン・インガルデンがその哲学者グループの先頭集団にいたことは疑いない。

大学で——主としてドイツで——ロマン・インガルデンは、活発に展開されつつあった現象学の学派の仲間入りをするようになったが、それはきわめて影響力のある学派だということがやがてわかる。その創始者エドムント・フッサールは、哲学における野心的な改革プログラムを書いた。それは哲学の土台を、人間の広い意味での経験、すなわち私たちの前に提示されるもの、たち現れるもの（現象学という言葉は、たち現れる**何ごと**かを意味する、古代ギリシア語のφαινόμενονに由来する）に置くという発想にもとづいていた。もしも私たちが、私たちの個人的な先入観や、日常的あるいは哲学的な思い込みや、学問理論に由来するさまざまな夾雑物を排除しつつ、何が現象しているのかを精密に述べる技術を身につけたならば、と同時に、それが（たとえば記憶された、想像された、観察された何ものかとして）**どのように**現象しているのかを言えるようになったならば、そうして得られた記述は、哲学や諸学におけるそこから先のあらゆる調査研究にとってもっとも適切な出発点となる。

つまり現象学は、第一に、私たちの経験の中で何がどのように現前するのかについての、最大限に理論を排した記述を獲得しようとする、言語による指示や提案の集合である。第二に、この哲学的潮流は、相対主義のさまざまな化身（心理主義や歴史主義）に対して、科学主義（およびその推奨する自然主義）に対して、さらには、超越論的に理解された経験よりも言語と論理が先行するというある種の分析哲学に対して、明らかに反対する立場にあった。第三に、現象と事象を区別する旧来の考え方を排して、現象は事象であると認めるべきだとフッサールは説いた。そのような現象と事象の同一視は、たとえ（日常的な認識では意識と無関係であると思われるような）樹木や岩石といった経験対象を構成する際ですら意識の役割を肥大化せずにはおかず、結果としてフッサールは——その後期の著作では——先験的観念論と呼ばれる立場に近いところまで行き着くことになった。



葬列（1970年。写真中央にカロール・ヴォイティワ枢機卿）

写真提供：クシシュトフ・インガルデン

現象学の新しい学派

ロマン・インガルデンはフッサールのもっとも優秀な弟子のひとりだった。しかし彼は、上に述べたような現象学の第一と第二の側面は受け入れつつ、恩師の観念論を排して、現実主義的な立場に踏みとどまろうと努めた。その独自のプログラムを実現しようとして書かれた記念碑的な大著が『世界の存在をめぐる論争』（第1巻、第2巻：1947年。第3巻：1974年）である。長い間この書は主としてポーランド語を解する哲学者たちに影響を与えてきたが、近年完成した英訳のおかげで、存在論や形而上学にたずさわる世界中の学者たちの関心がしだいに高まってきている。かつてインガルデンは、文学作品の、ひいては芸術作品全般の独創的なコンセプトを作り上げた学者として知られていた。そのコンセプトは主として、もともとドイツ語で1931年に発表された本『文学芸術作品』で提示されたものだった。インガルデンの全著作を俯瞰してみると、この本は『世界の存在をめぐる論争』のプレリュードとみなすことができる。というのも、リアリズムを防衛するためには、私たちには実在すると思われる対象と、意識によって構成された虚構の対象のさまざまな変種との違いをよく見きわめねばならなかったからである。はたして、そしてどの程度、インガルデンがリアリズムの防衛に成功したかということについては議論の余地があるが、彼がリアリズムをめざして進んでいった途上で示した多くの新しい小径が、それまでの哲学者には見えていなかった風景を見せてくれたということについては疑問の余地がない。

インガルデンによれば、哲学は存在論と形而上学とに分かれる。存在論は、**可能〔的〕**なことがらを、より正確に言えば、純粋な観念的質の間に生ずる必然的な関係を研究する。研究の方法は直観的分析であって、分析哲学のような論理的分析ではない。論理は、彼によれば、経験より二次的なものだからである。対する形而上学は、**事実として**存在することがらの本質と存在の様態を研究するのだが、形而上学に先立って存在論的な研究がなされなければならない（このテーゼに関しては実存主義者や実存主義的トマス主義者たちが同意していない）。インガルデンはさらに存在論を物質的存在論、形式的存在

論、実存的存在論に分けるが、これは、あらゆる存在は質料（内容）、質料を容れる形相、存在の様態の三つの側面を有するという彼の確信から帰結する。彼はこれら三種の存在論のいずれにおいても非常に興味深い詳細な下位分類を設けて対比するのだが、それらがまさに上述の哲学の新しい小径となっている。

インガルデンは、存在の様態に基本的な（可能な）四つのタイプを区別する——絶対的（超時間的）、観念的（時間外的）、純粹志向的（非時間的）、そして現実的（時間的）。それぞれの存在様態は、たとえば原初性⇔副次性、自存性⇔非自存性、自律性⇔非自律性、従属性⇔非従属性、今日性、亀裂性、脆弱性などといった、さまざまないわゆる「存在のモーメント」によって規定を受ける。芸術作品は純粹に志向的な様態で存在している。それは人間の間主観性のうちに基礎を有している。インガルデンが挙げている芸術作品のさまざまな属性の中でも、とりわけ重要なのが、多様な具体化（解釈）を許す、芸術作品の層構造（限定不能性）である。具体化されたものは美的対象と呼ばれ、美的対象には美的価値が、芸術作品には芸術的価値が対応する。インガルデンはまた、美的経験の分析にも少なからぬ寄与をしている。彼が示したのは、美的経験には多くの要因（知覚的、思惟的、意志的、想像的）が参加すると同時に、反復可能な力学を有していることであり、その力学にはいくつかの位相があるということだった。それらの位相とは、初期の情動、美的態度の形成、美的具体化の実行、承認もしくは非承認（出現する審美的価値に対する直接的反応）である。

主としてインガルデンの寄与は微妙な**弁別**の提案と説得力あるその根拠づけにある。ハードな分析ではとらえにくい、主観的な好みの領域とされる美学の分野においては、このことは格別な意味を持つ。彼に従って見てゆくと、この領域にも客観的な秩序が見えてくるのである。その意味でインガルデンの役割は、これまで知られていなかった植物の属や種を発見し、入念な記述にもとづき、新しい分類を提案する植物学者のそれと比べられるかもしれない。またこうした活動において、インガルデンの（ひいてはすべての現象学者の）哲学に見られる別の重要な特徴も見えてくる。それは**多元論**的性格である。私たちの経験の中でたち現れる世界には、多くの多様な存在のタイプ、多くのアスペクトや次元が存在し、それらを丹念に識別しなければならない。すべてを一つに拙速に還元しようとするのは低級な哲学の徴である。しかしまたそうした細部の差異の巧緻で精密な記述とは別に、伝統的な哲学が占めていた空間全体を見わたすことのできた、インガルデン一流の総合的なヴィジョンも大いに評価されねばならない。分析哲学の一派とみなされたルヴフ＝ワルシャワ学派で唱えられた明晰と精密の理想をあまりに一方的に理解することで生じる限界について、インガルデンははっきりと自覚していたのである。

弟子たち、後継者たち

ロマン・インガルデンは、国際的な哲学界においてその業績が評価された、現代のポーランド人哲学者のひとりだった。1931年、ドイツ語の著作『文学芸術作品 *Das literarische Kunstwerk*』が刊行されて以来、彼は、現象学に依拠した美学を代表する第一人者としてだけでなく、およそ現代のもっとも重要な美学者のひとりとみなされるようになった。やがてこの著作の英訳が1973年に出版され、彼の地位は確立された。哲学のこの領域におけるインガルデンの役割については、不断に更新されつづける、現在もっとも信頼できるインターネット上の哲学百科事典である『スタンフォード哲学百科事典 *Stanford Encyclopedia of Philosophy*』（オープン・アクセス方式で公開されている）に、2016年〔初稿は2003年〕エイミー・トマスソン（Amie Thomasson）執筆の「ロマン・インガルデン *Roman Ingarden*」という長大な項目が良い証言となっている。ポーランド語で書かれた『世界の存在をめぐる論争 *Spór o istnienie świata*』のドイツ語訳は1964年に出版されたが、2013年、2016年に英訳が出てはじめて、この著作に対するポーランド以外の国での哲学者の関心が高まりを見せるようになった。ポーランドの外では、インガルデンはフッサールやエディット・シュタインとの文通によっても知られている。彼の価値はその著作自体が証明するものではあるが、近年はポーランド人筆者によって書かれ、英語で出版された、解説的・伝記的文献のもつ意義が大きい。それ以前からもグイード・キュン（Guido Küng）やアンナ＝テレサ・ティミエニツカ（Anna-Teresa Tymieniecka）による紹介・啓蒙活動がはたした役割は小さくない。

ポーランドの哲学に対してインガルデンが及ぼした影響は計り知れない。イエジー・ペジャノフスキは彼をポーランド哲学のアリストテレスと称したが、インガルデンが取り上げたさまざまなテーマの多様さ、それらを適切に体系化し、階層化する才能、哲学史に関する広範な知識などを考えれば、その表現は決して根拠のないものではない。『世界の存在をめぐる論争』は、最高度の水準でプロフェッショナルに哲学を研究しようとする者にとっては最良の入門書のひとつである。インガルデンの弟子や後継者には、ダヌータ・ギェルランカ（Danuta Gierulanka）、アンジェイ・プウタフスキ（Andrzej Póltawski）、アントニ・B・ステンピエン（Antoni B. Stępień）、マリア・ゴワシエフスカ（Maria Gołaszewska）、ヨゼフ・ティシュネル（Józef Tischner）、ヴワディスワフ・ストウルジェフスキ（Władysław Stróżewski）、アダム・ヴェングジエツキ（Adam Węgrzecki）などの優れた研究者たちがいる。インガルデンの仕事のポーランドにおける影響力は、広い意味での現象学の枠をはるかに超えて広がっている。分析哲学派であれ、トマス主義者であれ、マルクス主義者であれ、そしてインガルデンに対する批判や立場の相違に関わりなく、優れたポーランド人哲学者であれば誰もが、この巨人のような大樹の陰に自分もいることを感じずにはいられなかったはずである。

ピョートル・グトフスキ

ロマン・インガルデンを記念する年にあたって思うこと



写真撮影：PAP イレナ・ヤロシンスカ

ポーランド議会の下院〔セイム Sejm〕は、2020 年を《ロマン・インガルデンの年》として制定することを、ほぼ全会一致で決議した。これを提案したのは、ロマン・インガルデンの長年にわたる職場であったヤギェロン大学の評議会である。本年はこの傑出した哲学者の没後 50 年にあたり、その顕彰にふさわしい機会となった。この提案を「法と正義」党の下院議員グループが取り上げ、私はそのグループを代表して、決議案を起草し、提出する栄誉を担った。「下院文化・マスメディア委員会」は全会一致でこの決議案を推薦した。

ロマン・インガルデンは、多くの人々によってポーランドのもっとも傑出した哲学者であるとみなされ、哲学の世界では、もっともその名を知られた人物のひとりである。しかしこの人物にあつて、もっとも大切に、もっとも人を惹きつけるものとは言えば、その独立不羈の精神であり、知的な不屈さである。もちろんその哲学的考察を築きつづけた。すぐれた一貫性もある。インガルデン教授は書物や論文や手稿の形で偉大な業績を残した。しかし彼が子孫に遺したもっとも大切なもの、それは知性と精神の力である。

ロマン・インガルデンの父はエンジニアだった。理科系の頭脳を持つロマンは、大学でまず数学と哲学を学んだが、それは彼の思考方法にも大きな影響を与えることになった。その後数学をやめて、哲学に専念したが、それはおそらく正しい選択だった。ルヴフ、ゲッティンゲン、フライブルク・イム・ブライスガウの各大学で勉強した。彼の博士論文（1918 年合格）指導教授は古今東西の哲学者の中でもっとも著名なひとり、エドムント・フッサールだった。博士号を取得してから帰国したが、前途ははなはだきびしかった。これほど立派な博士号とすばらしい才能とを持ちながら、大学での職を長年探さねばならなかった。およそ 15 年間、

インガルデンは高校教師として生計を立てることになる。もちろんその間も自分の哲学を発展させることは片時も怠らなかった。1928年には教授資格論文を書いたが、ルヴフのヤン・カジミェシュ記念大学で講じはじめたのは1933年のことだった。どうやら彼の思考方法、哲学の方法は、当時の学界で必ずしも容易に受け入れられなかったようである。

注目すべきは、彼がはじめから終始、わが道を行くという姿勢を貫いたことである。大学の職を求めて奮闘していた頃も然り、ルヴフで過ごした大戦の間も然り。オーストリア領出身でもあり、ドイツ語を完璧に操ったことも利用して、彼は戦争中、ドイツ語教師として生きのびたのだった。その戦時の時間をインガルデンは、もっとも重要でもっとも大部の著作『世界の存在をめぐる論争』の執筆にあてた。

戦後も、共産主義政権下、マルクス主義に妥協しなかった彼は迫害に遭うが、それでもわが道を歩む。講義や出版を禁じられ、強制的な休暇を取られ、できた時間を今度はインマヌエル・カントの『純粹理性批判』の翻訳にあてた。

この優れた哲学者が落ち着いて研究にいそしめるようになったのは、スターリン主義が終わり、1956年以降の雪どけの時代になってからである。そして実際、猛烈な勢いでヤギェロン大学での仕事をするだけでなく、世界中を飛び回り、講義や講演をし、学会に参加した。そして執筆した。大量に書いた。250点になんなんとする書籍、論文、そして大量の未刊手稿から成る巨大な業績をインガルデンは遺した。テーマは実に広範な範囲に及ぶ。現象学は、とりわけ美学的分析、文学作品の分析に役立った。もちろん私も国文科の学生として、文学理論の授業でインガルデンの著作に触れたことがあった。『文学作品について *O dziele literackim*』(『文学芸術作品』のポーランド語題)、あるいは『文学作品を認識することについて *O poznawaniu dzieła literackiego*』は、文学理論を深く究めようとする学生の必読図書である。

今次の下院の決議は、キリスト教世界の思想家たちとインガルデンの交流についても言及している。忘れてならないのは、彼とエディット・シュタインとの間で長年つづいた文通であり、彼の教え子の中には、カロール・ヴォイティワがいて、ユゼフ・ティシュネルがいたということである。インガルデン自身は自覚的な合理主義者だったが、異なる世界観を持つ人々と対話することができ、彼らのために学問的な指導者となることもできた。

世界に広く知られてはいない人々、あるいはまったく無名の人々であっても、彼らを顕彰することには価値がある。未来の世代に対する私たちの義務として、私たちは手本となるような人間像を提示する。それはまた、偉大な同胞に対する報恩の行為でもある。そのようにして、数年前、私たちは天才的な化学者・発明家であったヤン・チョフラルスキ (Jan Czochralski) を人々に思い出してもらった。同じようにして、人々に——ポーランド国内にとどまらず——思い起こしてもらったのが、〔イスラエル国の顕彰する〕《諸国民の中の正義の人》の称号を授与されたイレナ・センドレルである。2019年には、私たちは『別世界』の著者グスタフ・ヘルリンク＝グルジンスキ (Gustaw Herling-Grudziński) を顕彰した。私たちの集团的意識にはないものの、実際は学術、文化、社会の分野で世界的な業績・貢献を残したこうした人物が、他にもたくさんいるのである。今年の主人公ロマン・インガルデンもそうであったし、また別の哲学者ユゼフ・マリヤ・ボヘンスキ (Józef Maria Bocheński/ポーランド共和国議会上院で顕彰された)、あるいは下院で展覧会を行ったチェスワフ・タンスキ (Czesław Tański) のような学者もまたそうである。このポーランド議

会の良き伝統は、今後も必ずや継承されてゆくに違いない。

下院議員 ヤツェク・シフィアット Jacek Świąt

《ロマン・インガルデンの年》記念行事のいくつか

■2月——キェルツェ市にある国立ヤン・コハノフスキ大学の図書館で「2020年はロマン・ヴィトルト・インガルデンの年。もっとも優れたポーランド人哲学者の一人、ロマン・ヴィトルト・インガルデン没後50周年を記念する、出版物展」開催。同大図書館が所蔵するさまざまな出版物が展示された。展示会は二部に分かれ、第一部は、ロマン・インガルデンの家族の写真や肖像などを含む資料で構成されたが、インガルデンの著作に関係する資料の中では、とりわけ1947年にウッチ市の出版組合「ポロニスタ」が出版した『文学哲学論集 *Szkice z filozofii literatury*』が目をひいた。展示会の第二部の主要な展示品としてはエディット・シュタインとの文通、インガルデンの著作の翻訳書があった。

■5月12日～8月27日——クラクフ市にある現代美術館MOC AKで、写真展「哲学者と写真家」開催され、ロマン・インガルデンが制作したおよそ150点の写真が展示された（1942-1970年間に制作され、MOC AKに収蔵されている5000点の中から選ばれた）。撮影対象は自画像、肖像、自然景観、建築、静物など。インガルデンは大の写真愛好家で、彼が言うところの「きれいさの抽出可能なものであれば何でも被写体として撮影した」。

■6月14日——クラクフ市のラコヴィツキ墓地で、ロマン・インガルデン没後50周年を記念して、下院議長エルジュビェタ・ヴィテク（Elżbieta Witek）が墓前に灯明を供えた。式には哲学者の孫、クシシュトフ・インガルデン（Krzysztof Ingarden）も同伴した。「両大戦間期、ポーランドの学問、文化、芸術を代表するような素晴らしい人々がいたことを思い起こすことは大切なことです。最も優れたポーランド人哲学者の一人であった先生は、ヨーロッパだけでなく、全世界において、ポーランド哲学の名声を高めてくださいました」——ジャーナリストたちとの会話の中で、下院議長は語った。

■9月21日——クラクフ教育大学で「児童養育における責任。2020年《ロマン・インガルデンの年》を記念してその哲学に捧げる」国際学会開催。主催は、同大学の「学校教育・代替教育学講座」と「文化間対話学生サークル」。学会では、インガルデンが提案した、責任という現象が発生する四つの状況——誰かが何かについて責任を有する。誰かが何かについて責任を取る。誰かが責任を問われる。誰かが責任をもって活動する——に関連づけた研究発表が行われた。

■10月12日～13日——ヴロツワフ市で、国際学会「真理にいたる途上で人間について対話する。ヨハネ・パウロ二世——エディット・シュタイン——ロマン・インガルデン」が開催される。主催者は「エディット・シュタイン記念ヴロツワフ協会」と「ヴロツワフ教皇庁神学部」。研究発表は、20世紀ヨーロッパ人の精神生活に少なからぬ影響を及ぼした三人の優れた現象学者かつ人物の学問的業績に関するもので、彼ら自身の研究の深奥と独創性を研究するとともに、彼らが創りあげた哲学的コンセプトや人生上の個人的決断が、互いにどのように影響しあい、関係しているかという相互の連関に照明をあてる。

■グダンスク大学哲学科のアンナ・ヘンチカ（Anna Chęćka）博士は、「Ingarden in the garden——万人のための美学」と題して、四つの連続講義をYouTube上に公開した。

■「ロマン・インガルデン・デジタル・アーカイヴ」<http://ingarden.archive.uj.edu> は、ポーランド語と英語で、インガルデンの未公刊学術業績、および国内外の文化・芸術分野の著名人との文通に関する資料をインターネット上で公開している。世界的な学術情報サービスにとっては、ほとんどの資料が初公開となる。とりわけ興味深いものとしては、スタニスワフ・イグナツィ・ヴィトキエヴィチ（Stanisław Ignacy Witkiewicz）のインガルデンあて書簡があり、数年にわたる芸術家と哲学者の活発で豊かな知的交流の貴重な記録となっている。